

13 アーネスト・サトウ・西郷吉之助会見の地(本覚寺跡) 中央区中寺2

▶ 慶応3年(1867)7月27日、早朝、薩摩藩士 西郷吉之助が本覚寺を訪ねます。公使パークスが将軍徳川慶喜に謁見するため、サトウは大坂城に行かなければならない忙しいときでした。西郷は、予めサトウに手紙で来訪の意を知らせ、日時の都合を聞いています。7月27日午前7時という返事が来たので、西郷が訪れました。西郷はパークスと議論をたたかわせるつもりで来たらしいのですが、多忙なため会えないとわかるとサトウに矛先を変えました。この会談の内容については、西郷が大久保利通と桂久武に宛てた2通の手紙が残っています。7月27日付大久保への手紙では次のような記載があります。

(前文省略)大坂商社仏人(フランス人)と取り結び、大いに利を計り、候趣委敷(くわしく)申し聞け、仏人のつかわれものと御話しの通り言い掛け、些(いささ)か腹を立てさせて見たき賦(つもり)に御座候故、仏に憤激いたし候様説き込み候処、大いによく乗り、思い通りに怒らせ候処、段々意底を咄(はな)し出し候間、左の通りに御座候。

大久保と念入りに打ち合わせた西郷は、「フランス人の使われ者」ともちかけ、サトウに腹を立てさせ本心を語らせることに成功します。サトウは西郷の挑発に乗ってしまったことを後年知り、ショックを受けています。西郷から聞いたことに一番刺激されたのは、幕府とフランスが兵庫開港で貿易を独占する計画があるということでした。開港問題に最も尽力したイギリスが、甘い汁を吸おうとするフランスにしてやられたと思ったのかもしれませんが。

西郷がサトウからイギリスの真意を聞きだすことに成功したのに対し、サトウは西郷から薩摩藩の意底(倒幕に関することなど)を聞き出せていません。

翌日28日の午前10時、サトウが西郷を訪ねるという約束を交わし、この日の会談を終えています。28日の会談で西郷は、薩摩の意底をサトウに少し伝えたようです。



アーネスト・サトウ



西郷吉之助

幕末から明治にかけ、この両者は何度となく会談する機会を持ちます。西郷が明治10年、兵を鹿児島で挙げたとき、サトウはたまたま鹿児島におり、西郷と会っています。この時の西郷は、約20名の護衛に護られ「虜囚」同然であったようで、サトウの日記には「会話は取るに足らないものだった。」としか書かれていません。

14 英国公使 ハリー・パークス宿泊の地(正法寺) 中央区中寺2

▶ 慶応3年(1867)3月、第15代将軍となった徳川慶喜と各国公使との謁見が大坂城で行われた際、パークスはアーネスト・サトウに前もって宿舎の手配をさせていました。

この時は、本覚寺を中心に3つの寺が割り当てられたとのことで、正法寺であったという決め手はありません。

しかし、次の来坂となった同年7月、パークスは正法寺に宿泊したとアーネスト・サトウの日記に記載されています。

慶応3年(1867)7月24日、イギリス公使ハリー・パークスは長崎で起こった「イカルス号事件」(英国水夫が日本の武士に殺害されるという事件)の協議を幕閣と行うため来坂し、ここ正法寺に宿泊します。

翌25日から26日にかけて板倉勝静と談判を行います。海援隊士による犯行と疑がわれていましたので、パークスと幕府高官が



ハリー・パークス

高知に行き調査を行うというパークス側の意見を、幕府は全面的に受け入れます。

この会談直後、パークスは将軍徳川慶喜から大坂城への招待を受け、7月27日(陽暦8月26日月曜日)、3月に続いて大坂城の白書院で謁見します。その日、慶喜は佐賀藩の前藩主である鍋島閑叟をパークスに引き合わせています。



15 砲術家 荻野六兵衛照清墓所(江国寺)

中央区中寺2

- ▶ 荻野六兵衛照清は江戸中期の砲術家でした。荻野流の宗家に生まれ、父である荻野六兵衛安種は明石藩に仕えていましたが、照清が家督をついでから明石藩を離れ、大坂の玉造に住んで砲術を教えました。(嫡子の照良は再度明石藩に仕えます。)大塩平八郎の乱の際、鎮圧に功績を残した坂本鉉之助は荻野流砲術の宗家を継いでいます。



16 与力 砲術家 坂本鉉之助墓所(大倫寺)

中央区中寺2

- ▶ 坂本鉉之助は寛政2年(1790)、荻野流砲術家坂本天山の子として生まれ、万延元年(1860)に亡くなっています。通称は鉉之助(げんのすけ)、諱(いみな)は俊貞、字は叔幹、号は鼎齋です。大坂城代下の吏員で和流砲術に詳しく「暴母迦農説標題」(ボンペカノン説)の著者として有名です。天保8年(1837)大塩平八郎の乱の際、砲撃で乱の鎮圧に功績をあげ、褒賞を受け旗本格に列せられ、広く名が知られるようになりました。坂本鉉之助は、玉造口定番与力、桃谷(現在の大阪市中央区安堂寺町または上本町西周辺)の屋敷を与えられ、砲術教授も行っていました。嘉永6年(1853)2月11日、吉田松陰が大坂で最初に訪問した人物は、坂本鉉之助でした。来坂した翌日2月11日に桃谷にある坂本鉉之助邸を訪れています。吉田松陰の「癸丑遊歴日録」には次のように記載されています。
十一日 晴。尚ほ舟に在り。坂本鉉之助を其の桃谷の邸に訪ふ。鉉之助、號は鼎齋、諄々と善く談じ、其の著はす所の暴母迦農説評題を出し示す。鼎齋曰はく『土佐の老候は砲技を嗜み、藩制毎年砲八門を鑄る、口径の長短皆砲家の建白を聴き、皆填するに周興嗣の千文各々一字を以てす。(以下省略)』
坂本鉉之助邸の所在地は、手がかりとなる資料が少なく、現在のところ桃谷にあったことしかわかっていません。
JR大阪環状線に桃谷駅がありますが、その周辺ではなく、大阪市地下鉄谷町6丁目駅周辺に該当します。
桃谷の地名の由来は、以前このあたりは高低差があり、桃林が多かったことによるようです。



坂本鉉之助邸跡



坂本鉉之助邸跡近くにある桃谷公園



坂本鉉之助邸跡周辺



17 英国外交官 アーネスト・サトウ宿泊の地(法雲寺) 中央区中寺2

- ▶ アーネスト・サトウの5回目の来坂は、慶応4年(1868)2月です。「大政奉還」「王政復古の号令」「鳥羽伏見の戦い」とめまぐるしく展開し、幕府から薩長中心の新政府誕生の中、慶応4年(1868)1月、神戸事件を解決した直後です。本覚寺からそれほど離れていない法雲寺を宿泊地としました。サトウの日記には次のように記載されています。

われわれの宿舎は中寺町の寺院である。
非常に準備がよく出来ている。ミットフォードとわたしは法雲寺を使っているが、手入れの必要はまったくない。
この寺は、われわれ二人のためにとくに用意されたものである。
サトウが来坂中に、堺事件が勃発します。

